

「としまの文化デザイン これまでとこれから」(豊島区文化商工部文化デザイン課編)  
にみる豊島区 10 年の文化創造都市の軌跡

後藤和子 (埼玉大学経済学部・大学院経済科学研究科教授)

豊島区では、2013年2月に、2002年から進めてきた都市文化政策の10年を振り返り、今後の10年を展望してシンポジウムを開催した。筆者は1年以上前から豊島区と一緒にシンポジウムや分科会の内容を準備するとともに、豊島区のクリエイティブ産業調査や、文化資源の広がりを示す新旧対比マップ等も作成していただいた。

10年前には、文化政策の担当者もほとんどいないに等しかったところから、今日の充実ぶりを予想することは難しいほど、この10年で次々と重要な拠点ができた。その1つは、都市文化政策を担当する区の行政組織である。2003年には、文化デザイン化が新設され、2006年には、文化と商工(生活産業と観光)を担当する商工部が統合され、文化商工部が新設された。そして、2007年には、文化商工部が、生活産業課、文化デザイン課、文化観光課、学習・スポーツ課を統合する部署となった。文化を担当する部局と経済を担当する部局が統合されているのは、他にはない豊島区の特徴だと思われる。

2つめは、廃校をアートNPOに貸与した「にしすがも創造舎」である。3つめは、フェスティバル東京の舞台ともなっている舞台芸術交流センター(あうるすぽっと)である。

同じ区内でも異なる特徴を持つエリアを抱える豊島区が、その特徴ある地域文化資源のDNAを掘り起こしながら、点から面へと都市文化政策を展開させて効果をあげた経緯は、「としまの文化デザイン これまでとこれから」に詳しく掲載されている。今後、文化によって都市を再活性化させたいと思っている他の自治体や市民の方々に、是非、ご一読をお勧めしたい。

その中には、近藤誠一文化庁長官や福原義春氏をはじめ、新庁舎を設計した隈研吾氏のメッセージや、「池袋は、一人ひとりが生きる可能性がある街に私には感じられてきた。芝居や美術への関心は、モノづくりの現場が持つエネルギーの存在を感じさせてくれる」という北川フラム氏のメッセージなど、興味深い論考が掲載されている。